

ニュースレター

ゆりおもての森から

林野庁 九州森林管理局
西表森林生態系保全センター
平成 29 年 2 月発行 No.49 号



モモイロラッパバナ

「自然環境教育推進のための連絡会」を開催

平成 28 年度の「自然環境教育推進のための連絡会」を 12 月 26 日(月)、西表島中野の地域活性化施設(わいわいホール)において、西表島等で自然観察会等の活動を行っている研究機関、行政機関、各種団体等の代表及び先生方に出席頂き開催しました。

意見・要望として、

- ・夏休みなどを利用して、教師向けの研修ができないか。西表の自然について、また、花木や草花について校内研修や学習で取り組めないか。

カリキュラムの利用実態として、

- ・長く西表にいる人は利用目的を知っているが、新しく来る人はカリキュラムのことが分からないので、赴任してくる職員の集会があるのでその時にアピールすると良い。

- ・各地域の子供育成会にも配布した方が良い。

といった意見や、表紙や中身の改訂(見出しの工夫、ダイジェスト版の作成、写真の変更、他の学校の取り組み事例等)の要望が出されました。

当センターとしては、これらの意見・要望を踏まえ、育成会には今年度中に配布し、各学校には 4 月にセンター職員が挨拶回りの時に配布し説明するようにしたい。

また、カリキュラムについても次回作成時に各意見等を参考にしていきたいと考えています。



連絡会の様子

ヒナイ川の利用状況調査報告

1 月期ヒナイ川流域における利用状況調査を 1 月 19 日(木)に実施しました。

当日は一時土砂降りの雨が降りましたが、利用者は、カヌーツアーが 7 組(ガイド含め 20 名)でした。ほとんどが県外の客で、石垣に滞在して日帰りである人や、午前中由布島に行き午後から滝を見て西表に宿泊するという人もいました。しばらくまとまった雨が降ってないせいか滝の水量も少なめでした。



利用客(カヌー)の様子

JICA 沖縄国際センターから研修生を受け入れ

国際協力機構(JICA)沖縄国際センターによる「保護地域協働管理を通じた脆弱な沿岸・海洋生態系保全」コースの研修生を12月1日に受け入れました。

研修生は5カ国から9名が参加しており、はじめに保護区におけるマングローブ林の保全等に関する講義を受講、つづいて仲間川で自然環境教育に利用している木道や巨樹・巨木の一つであるサキシマスオウノキの現地で当センターが実施している業務内容等について説明を行いました。



サキシマスオウノキの現地で



木道で説明を聞く研修生

ソウシジュ〈外来種〉モニタリング調査を実施

マメ科の常緑の高木です。葉のように見えるのは葉の柄の部分（細長い部分は葉の葉柄が変化したもの）で葉は退化しています。

5月ごろ、黄色の小花が球状に集まって咲き、豆果になります。

明治時代に緑肥用として持ち込まれ、繁殖力が強く材は薪炭・家具用として利用されてきました。

（原産：フィリピン・台湾原産　高さ約10メートル）



ソウシジュの葉

平成28年1月20日に西表国有林131林班において、外来種ソウシジュのモニタリング調査を実施しました。この調査は、外来種であるソウシジュが、西表島西部の白浜を起点とする旧白浜林道の奥深い内陸地に侵入していますが、その生育状況がどのようになっているか、4区域の調査プロットにおいて毎年度モニタリングしているものです。

ソウシジュの生育状況は昨年の調査と比較して、状況の変化は見受けられず稚樹の発生も確認できなかったことから、全体として衰退の方向に向かっていると思われます。

今後も引き続き状況等の観察を行い取りまとめることとしています。



ソウシジュの調査の様子



ソウシジュ

トクサバモクマオウの駆除モニタリング調査を実施

西表島の浦内川河口において、トクサバモクマオウの巻き枯らしを試験的に実施しています。

現在では、この地域のようにモクマオウがマングローブ林に侵入しているところがあり、陸地化の懸念が高まりつつ生態系への影響が危惧されています。

スギナを思わせる小枝や葉は繊細さではあるものの分解されにくいのが目立つ状況です。

さらに強風に弱いため、台風時の幹折れなどの被害や白骨化したものの落下が見受けられます。

このようなことから、モクマオウの駆除検討を行った結果、スギやヒノキに効果がある樹皮を剥離しての巻き枯らし手法を試験的に実施することとしました。

巻き枯らし手法として、樹皮剥離の幅を20cm程度とし、剥離する箇所を地上から120cm、もう一つは樹皮剥離の幅は変えずに根際ぎりぎりを剥離する二つの方法でそれぞれ試験木を設定しました。

平成28年11月末に巻き枯らし手法を行い3ヶ月経過したが、現在のところ顕著な変化は見られませんが、経過観察を実施して行きます。



マングローブ林内のモクマオウ



巻き枯らし作業の様子



根際を巻き枯らしたモクマオウ

モモイロラッパバナ「ノウゼンカヅラ科」 *podranea nicasoliana*

淡いピンク色のラッパ状の花が集まって綺麗に咲いています。

葉は奇数羽状複葉と呼ばれる鳥の羽のような葉で、花との色合いもよく、とてもやさしい色合いで全体的に柔らかい感じがします。

原産は南アフリカ原産のつる植物。挿し木で増やせます。



西表島で生息する外来種

セイヨウヒルガオ



ヒルガオカ科 セイヨウヒルガオ属

ヨーロッパを原産地とする。南北アメリカ、オセアニア、アジア、アフリカに移入分布する。0.5-2m くらいに成長する。花や葉など全体にヒルガオより小型。葉は長さ2~5 cm、卵状鋸形、基部は少し張り出すが、葉形の変化が多い。葉柄は長さ1~3 cm。花は直径約3 cm。花冠は長さ1.5~2.6 cm、白色~ピンク色。

日本では1940年代以降、観賞植物として導入された。きれいな花を咲かせるが、成長が早く、栽培している植物を覆ってしまうため、庭ではしばしば雑草として迷惑がられる。また、農作物にも悪影響を与える。

侵入生物 / 外来生物とは？

人間によって自然分布域以外の地域に移動させられた生物を「外来生物 / 外来種」「侵入生物 / 侵入種」「移入生物 / 移入種」などといいます。貿易大国の日本では、これまでに2000種を超える外来生物が記録されています。外来生物は、移動先で繁殖集団を形成し（定着または帰化と呼ばれます）、その土地の生態系・農林漁業・人間の健康や日常生活などに対して影響を及ぼすことがあります。大きな影響を及ぼすものを、特に「侵略的外来生物」といい、世界的な問題となっています。

原因は何か？

外来生物問題が生じる原因は、様々な形で人為的に生物が運ばれ、野外に放たれること（導入と呼ばれます）です。導入されたものの一部が、野外で繁殖集団を形成し（定着と呼ばれます）、長期にわたって様々な影響を及ぼすようになります。運ばれ方（**侵入経路・導入経路**）は様々ですが、いずれも我々の日常生活と密接に関係しています。運ばれ方によって予防方法が異なるため、導入経路の特定は、防除戦略を立てる上で重要な課題の一つです。

その影響は？

外来生物による影響は、運ばれる生物の種類と定着先の環境の組み合わせによって様々です。生態影響（その地域在来の生物多様性・生態系への影響）のほか、外来生物の持ち込みによって、いわゆる害獣・害虫・雑草などと同様の農林水産業被害・人間への健康被害を新たに引き起こすこともあります。

（引用：国立環境研究所 侵入生物データベース）

西表島で生息する外来種



歩いていると、蜂が刺したように足指がチクリ。慌てて靴を脱いでみると、なんと靴の中からサソリが出てきたではないか。なんやこいつ・・・・・・・・

その場でビックリ、足指を刺され痛かったのだが、痛さがどっかにぶっ飛び、腰がぬけるような、もう死ぬのではないかと一瞬暗くなった。

初めて生のサソリを目にした驚きと Made in Japan のサソリがこの地にいたことを知った。

マダラサソリ

分布：先島諸島、小笠原諸島（国内には江戸時代に侵入した）
無毒とされるほど毒性が低い、本種はやや毒性があるもののミツバチ程度とされ、危険なサソリではない。

西表島の似たものの植物

島バナナ

V s .

バショウ



区 分	バナナ (大型の多年草)
分 布	沖縄県、鹿児島奄美群島 熱帯、亜熱帯地域
原 産 地	東南アジアの熱帯地域
葉	葉の裏には白粉がある バショウより非常に厚い
苞	赤紫色
果実	緑色から黄色 おいしく食べられる

説 明	日本では古くは芭蕉と呼ばれたが、実を食するものは実芭蕉(みばしょう)とも呼ばれる。漢名は「香蕉」。食用果実として非常に重要で、2009年の全世界での年間生産量は生食用バナナが9581万トン、料理用バナナが3581万トンで、総計では1億3262万トンにのぼる。アジアやラテンアメリカの熱帯域で大規模に栽培されているほか、東アフリカや中央アフリカでは主食として小規模ながら広く栽培が行われている。 また、花を料理に使う地域もあり、葉は皿代わりにしたり、包んで蒸すための材料にしたりするほか、屋根の材料などとしても利用される。
-----	--

区 分	バショウ (大型の多年草)
分 布	日本の温暖地 熱帯を中心
原 産 地	中国南部
葉	葉の裏には白粉がない
苞	黄色
果実	種が多いが熟せば食べられる

説 明	主に観賞用として用いられる。花序は夏から秋にかけて形成される。実がなることはあまりないがバナナ状になり、一見食べられそうにも見えるが、種子が大きく多く実も綿のようで、タンニン分を多く含む種株もあるため、その多くは食用には不適である(ただし追熟させればバナナ同様食用になりうる実をつける)。 琉球諸島では、昔から葉鞘の繊維で芭蕉布を織り、衣料などに利用していた。沖縄県では現在もバショウの繊維を利用した工芸品が作られている。
-----	---

林野庁 九州森林管理局 西表森林生態系保全センター

〒907-0004 沖縄県石垣市登野城 55-4 石垣地方合同庁舎内
TEL : 0980-88-0747 FAX : 0980-83-7108

URL: http://www.rinya.maff.go.jp/kyusyu/iriomote_fc/index.html

